

## 酪農経営にかける私の挑戦

北海道更別農業高等学校 農業科 2年 鳥羽 耀己

私の家は、北海道に約120年前に入植し、父で3代目です。入植当初は牛、馬などの畜産経営をしていたようですが、祖父の代から畑作、酪農の複合経営です。

現在の我が家の経営状態は、酪農部門は搾乳頭数25頭、育成牛を合わせても36頭しかいません。畑作、園芸部門も馬鈴薯、ビートを中心とした耕地面積は20haと、一戸あたり平均耕地面積が40haを超える十勝の中では経営規模は小さい農家です。

今使っている育成舎は、曾祖父が開拓した当時のものを使用しており築70年以上が経ちます。今から2年前までは、バケット方式で搾乳をしていました。重いバケットを持ってバルククーラーと牛の間を何回も往復する作業が続き、効率も悪く時間ばかりかかることから、肉体的にもかなりの負担を強いられていました。パイプライン方式を導入し作業を行った時は「搾乳ってこんなに楽なんだ」と感動したことを今でも鮮明に覚えています。

私は鳥羽家4代目を継ぐため更別農業高校農業科に入学しました。家を継ぐにあたり父は酪農部門の規模拡大をする意思がないことを教えてくれました。

私の住んでいる清水町熊牛地区でも、フリーストールやフリーバーン方式の牛舎を採用し、搾乳はロータリーパーラーやロボット搾乳をしている所もあります。搾乳頭数は200頭を超え、家族経営ではなく法人化し従業員を雇い経営している所もあります。

「労力を最小限に抑えるために機械化を進め、規模拡大をしなければグローバル化が進んでいる現代農業の中では生き残っていけないのではないか」。近代的な経営を行っている酪農家と比較すると、我が家の経営はあまりにも小規模で、将来への不安を感じた私は父の言葉に疑問を持ち、率直に規模拡大の必要性を訴えました。父は「規模拡大には莫大な費用がかかる。グローバル化が進み先行きの見えない農業情勢の中でお前に多額の借金を背負わせたくない」。父の思いを知った私は、まず既存の施設で経営を安定させ、収益をあげていく方法を考えました。

一つ目は、徹底した飼料費の削減です。我が家の耕地面積は20ha、ビート、小豆などの栽培も行っていることから、酪農部門に割り当てられる畑は採草地の5haのみです。デントコーンを栽培したくても出来ないのが現状です。

飼料設計は、乾草と購入した配合飼料を与え、牛一頭の1日当たりの飼料費は約1,000円と生産費用の60%以上を占めています。

「飼料費の削減が収益向上の鍵を握る」。そこで考えたのがTMR方式の充実です。

私の家では、今から6年前清水町御影にあるTMRセンターと連携して、自家生産した乾草と購入した配合飼料から、飼料を配合し牛に給与しています。この配合飼料の割合を

減らし、自給飼料の割合を増やしたいと考えています。

酪農先進国のイスラエルでは、世界最先端のTMR方式を導入しています。国土の70%が砂漠で、作物の栽培が厳しい国であることから、オレンジの皮、パンの残りかすなどの食品残渣物を巧みに使い、平均乳量が世界1位の実績を残しています。

十勝に目を向けると、砂糖工場から廃棄されるビートかすや、でんぷん工場から廃棄されるじゃがいもかす、廃棄率40%を占めるにんじんなど、たくさんの食品残渣物、廃棄物があります。この廃棄物を有効利用し、牛の飼料にしていくことを考えています。すぐに、すべての飼料を食品残渣物でまかなうことは難しいと考えます。まずは、1日当たりの飼料費を30%減少させることを目標に、TMRセンターの指導員と飼料設計を進めていきます。

二つ目は、資源循環を通して経費削減をしていきます。私の家では、小麦を栽培しているため、麦わらは牛床の敷きわらに使っていますが、栽培面積が少ないために、敷きわらが不足しています。不足分は他の業者より購入していることから、年間約100万円の経費が必要となります。

そこで、この費用を減らすため、豆がらを乾燥させ牛床に使うことを考えています。十勝は、小豆、金時豆、大豆などの豆の産地でもあります。豆を収穫した後の豆がらをよく乾燥させれば、麦わらと同じように使えらると思えます。

さらに、木材工場から廃棄されるおがくずや木くずを使う方法も検討しています。

本校の牛舎でも、おがくずを牛床に使っていますが、牛の健康面、安全面にまったく問題がないことが証明されています。このように、廃棄されている農業資源、産業資源を有効活用し、経費削減を目指していきます。

三つ目は、飼育頭数の少なさを最大限に活かすことです。飼育頭数が少ない分、牛一頭一頭に目配りができます。父は「牛を毎日観察していると、病気や発情の兆候が一目でわかる、特に発情兆候を示す時は、牛の顔つきが変わるのがわかる」といいます。

最近の研究では、牛が発情の兆候を示すと歩数が増えると言われています。飼育頭数が何百頭もいるメガファームでは、牛の足にタグをつけて牛の歩数を調べ多額の資金を使ってコンピュータ管理をして、牛の発情兆候を確認しています。

確かに、施設や設備を整え、飼育頭数を増やしコンピュータ管理で牛を飼育する方法もあるでしょう。

しかし、規模拡大が進めば家族経営では難しく、人を雇わねばなりません。現在の日本は人手不足、最低賃金は年々上昇し雇用の確保が難しいと言われています。牛一頭一頭に目配りができ、家族で経営できる規模で牛を飼育していくのが、現在の我が家にとって最善の方法であると思えます。

先日私が描いた経費削減のビジョンと「経費削減が実現できれば、将来的には家族で

経営出来る範囲で規模拡大をしていきたい」と父に話をしました。父は嬉しそうに「お前の考えは間違っていない。お前の代で経費削減のめどがたてば反対はしない」と背中を押してくれました。

私が今こうして酪農を営めるのは、先祖の鳥羽木平が荒れ地を開拓し、開墾していったからです。

鳥羽家4代目となる私は、厳しい農業情勢の中、フロンティアスピリッツを持って、この地で力強く歩んでいきます。そして、これから5代目、6代目となる私の子孫が夢を持って酪農経営をできるよう、精一杯この更別農業高校で学んでいきたいです。

---